



～ 院長のお話 ～

4月13日に当院は開院15周年を迎えました。開院当初は、患者さんも少なく、のんびりとした診療を行っていました。どのように小児科診療所の医療を行うか手探りの状態でした。勤務医をしていた時と比較すると、病院を受診する子どもたちの症状は、感染症・アレルギーが中心となりました。そのうち“地域医療”とは何か、を少しずつ理解でき消化できるようになってきたように思います。

この15年で小児医療は大きな変化を遂げました。開院当時、迅速診断できるのは溶連菌感染症のみでしたが、現在ではインフルエンザ、RS、ロタ、アデノ、ノロなどが診断できるようになりました。そして、インフルエンザ治療は抗インフルエンザ薬の登場で大きく変化しました。また、はしか、百日咳などは毎年流行して多くの子ども達が入院していましたが、予防接種率の向上により、現在ではほとんど見ることもない病気となっています。さらに、今では多くの子どもたちが接種しているインフルエンザワクチンは、開院当初、接種を行っていた医療機関は当院ぐらいでした。喘息も治療法が大きく変わった病気の一つです。さまざまな予防薬の登場でコントロールがよくなり、夜間救急ではほとんど見ることもない病気になってきています。しかし、これからも予防接種の種類増加や感染症の治療も変化していくことが予想されます。今後も子どもたちの健康を支え、成長を見守っていきたくて考えています。

患者さんや多くのスタッフ（事務、看護師）に助けられながら、それぞれの子どもたちに必要なことは何かを考え、よい医療を提供することを常に意識した小児科医院を目指したいと考えています。

最後に、風疹が東京等の都市部で成人男性を中心に流行しています。感染拡大を起こさないためには、大人も予防接種を受ける事をお勧めします。わからないことがあればお気軽に病院スタッフに相談してください。

溶連菌感染症

当院で最近溶連菌感染症の患者さんが多くみられます。高熱が出て、強いのどの痛みを伴う病気です。幼児期から学童期に多くみられます。

原因・・・溶連菌の飛沫感染(溶連菌が患者の咳やくしゃみで飛び散り、それを吸い込んで感染)潜伏期間は2～7日

- 症状**・・・発熱 38～39度くらいの高熱を出すことが多い(37度台の微熱のこともあります)
- ・のどの痛み 咽頭炎や扁桃炎を起こし、のどの強い痛みがあります
 - ・いちご舌 舌がいちごのように赤く、ブツブツになることがあります
 - ・発疹 身体や手足に小さくて赤いかゆみのある発疹がでることがあります口のまわりには発疹はでない
 - ・リンパの腫れ ・皮膚がポロポロむける ・吐気、嘔吐、腹痛

《合併症》

- ・急性腎炎(腎機能が低下する病気、顔のむくみ、血尿などで気づく)
- ・リウマチ熱(発熱や関節痛、ひどい時は心臓に炎症を起こす)
- ・アレルギー性紫斑病

《治療》

溶連菌に有効なペニシリン系、その他の抗生物質の服用(約10日間)

抗生物質の服用で2、3日で症状はおさまりませんが、処方された薬は必ず最後まで服用して下さい。途中でやめると再発したり、合併症を起こしたりします。

皮膚のかゆみのひどい時は、抗ヒスタミン剤を内服したり、かゆみ止めの軟膏を使います。兄弟同士でうつりやすいので予防のため抗生物質を3日間くらい服用します。

ただしのどの痛みなどの症状がある場合は受診して下さい。

※確認のため薬を飲み始めて3週間後に検尿をしています。

《家庭でのケア》

食事と水分補給

食事は軟らかく、刺激の少ないものをあげましょう。食欲が落ちると脱水が心配になるので水分補給に気をつけて下さい。

かゆみのケア

発疹が出てかゆみがひどい時には涼しくしてあげましょう。あつくて汗をかくとかゆみが増します。お風呂もあたたまりすぎないようにしましょう。

こんな時は受診を

- ・薬が飲めない
- ・薬をきちんと飲んでも熱が続く、のどの痛みが続く時
- ・下痢が続いて元気がない時(抗生物質を飲んで下痢を起こすことがあります)
- ・2～3週間後くらいにむくみがでたり、元気のない時(急性腎炎などの症状)
- ・動悸、息切れ、関節痛など
- ・動悸、息切れ、関節痛など
- ・薬を飲んでる途中、終わる頃に蕁麻疹がでた時(薬の副作用の場合があります)
- ・感染を繰り返すこともあるので、同じような症状があれば早めに受診して下さい。

登園・登校のめやす

抗生物質を飲み始めて2日間は休んで下さい。3日目以降は熱もなく元気なら行ってかまいません。



【予防接種調査 第2弾】

【H24. 9月～10月】(ポリオの注射開始)

【H24. 11月～H25. 2月】(四種混合のワクチン開始)

～ワクチンデビューは

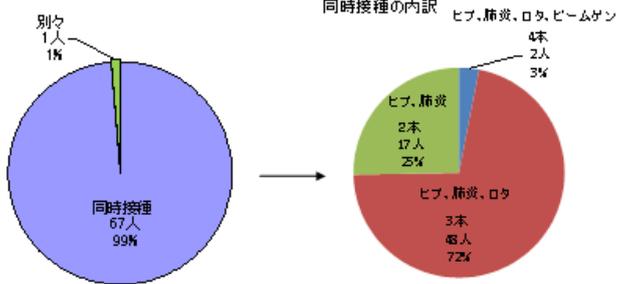
生後2ヶ月から同時接種で～

前回院内報で当院の接種状況を報告しましたが続編(H24. 9月～H25. 2月)をお知らせします。※第17号:H24. 10月発行
H24.9月～不活化ポリオの接種が開始
H24.11月～四種混合ワクチンの接種が開始

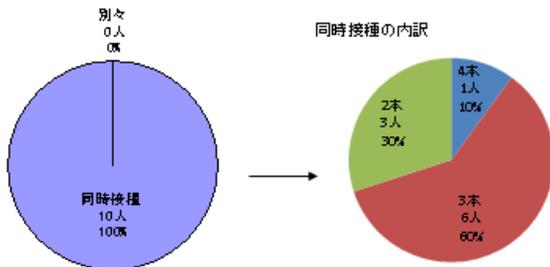
初回接種月齢(78人)



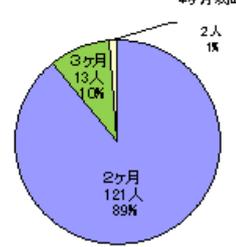
生後2ヶ月で初めての注射を受けた人(68人)



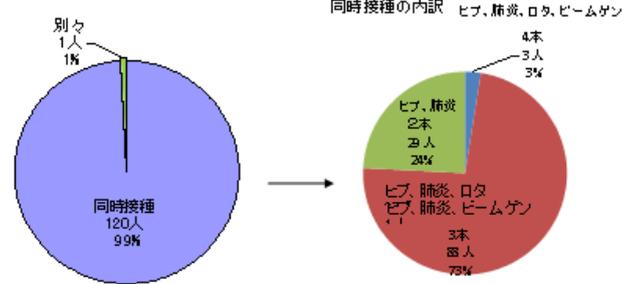
生後3ヶ月以降で初めての注射を受けた人(10人)



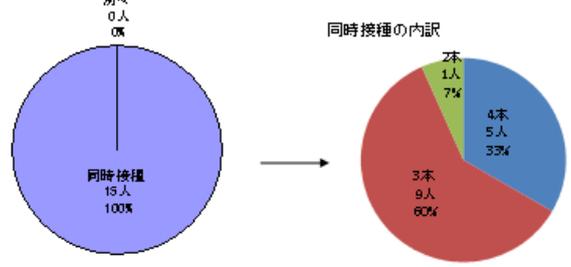
初回接種月齢(136人)



生後2ヶ月で初めての注射を受けた人(121人)



生後3ヶ月以降で初めての注射を受けた人(15人)



前回と比べ...

- 2ヶ月接種が増えました
- ロタワクチンの接種が増えました (57%→72%)
- ビームゲンの接種が増えました

風しんから赤ちゃんを守りましょう

風しんの患者数が過去5年間で最高の勢いで増えています。今年3月時点ですでに昨年の患者数を上回っています。首都圏が流行の中心でしたが、地方にも広がってきています。特に10代前半～59代前半の男性、10代後半～30代前半の女性が多く発病しています。

妊娠初期の女性が風しんにかかると赤ちゃんに難聴や心疾患、白内障や緑内障などの障害、精神運動発達遅滞(先天性風しん症候群)が起こる可能性があります。赤ちゃんがそのような生まれつきの病気にならないよう、家族みんなで風しんの予防接種を受けることをご検討下さい。

昭和54年4月1日以前の生まれの男性は、子どもの頃定期接種のチャンスがありませんでした。風しんの予防接種は、はしか(麻しん)も一緒に予防できる麻しん風しん混合(MR)ワクチンで受けることをお勧めします。

風しんとは

風しんウイルスにより急性の発熱と発疹を起こす病気

晩冬から春、初夏に流行します。

咳や鼻、くしゃみなどによる飛沫感染、潜伏期間は14～21日

合併症：風しん脳炎(6000人に1人)

血小板減少紫斑病(3000人に1人)

先天性風しん症候群

予防接種

- 子ども 定期接種で2回(1歳代と小学校入学前の前年の2回 MRを接種)
- 成人男性 風しんにかかったことがない、風しんワクチンを受けていない、どちらも不明な人、MRワクチンを接種することを検討してください。
- 成人女性 妊娠前に風しんの予防接種を検討してください。(接種後2ヶ月は避妊が必要です。接種回数は子どもの頃の接種回数を含めて2回です)

編集後記⇒寒暖の差が激しく、体調を崩しやすい

季節です。無理せずに規則正しい生活を心がけましょう。